読解 1 入門チャレンジ

伝統技術を引きつぐ

沖縄で職人を育成

2021年5月22日掲載記事を元に作成

育成事業の参加者に瓦づくりを教える瓦工場の社長（右）=2021年3月、沖縄県与那原町

琉球王国時代から続く赤瓦づくりや漆塗りの伝統技術を引きつごうと、沖縄県で職人を育成する取り組みが進んでいる。技術を活用する機会が減り、職人の育成が難しい状況が続いていた。火災で焼失した*首里城の再建、その後の修復にもつなげたい考えだ。

2021年3月中旬、与那原町の瓦工場で、男女5人が赤く焼き上がった瓦のできばえを確認していた。5人は、一般財団法人沖縄美ら島財団が職人を育てるために始めた事業の参加者。4カ月かけて赤瓦の手づくりの製法を学んできた。講師を務める同工場の社長（71）は「いい色に焼き上がった。実際に使えるものではないが、初めてにしては上出来」と声をかけた。

今回の育成事業は、沖縄美ら島財団が文化庁から約600万円の

●上の記事を読んで後の問いに答えましょう。

1 沖縄県で伝統技術の職人が育成されるのは、どんな状況があるためですか。また、この取り組みにはどんなことが期待されていますか。それぞれ記事を参考に書きましょう。

●状況

状況が続いているため。

●期待されていること

こと。

2 「沖縄美ら島財団」の取り組みについてまとめた次の文章の□に当てはまる言葉を、記事中から抜き出しましょう。

研究室を発足させて□時代の美術などを調査研究してきた。人材育成や□が重要であると感じ、2020年から職人の□を始めた。

【琉球王国】
1429年、尚巴志が現在の沖縄県にあたる琉球を統一して樹立した国よ。首里（現在の那覇市）を首都としたの。1609年、薩摩藩（現在の鹿児島県）に征服されて、明治政府が1879年、沖縄県を設置したことで滅亡したわ。

補助を受けて、2020年秋から始めた。

財団は琉球王国時代の歴史や美術、工芸品などの調査研究を担う「琉球文化財研究室」を、2015年に発足。首里城を始めとする様々な文化財の修復や復元にかかわるなかで、人材育成や技術継承の重要性を痛感していたという。

課題は、職人たちの仕事の不安定さ。古い建造物の修復などは頻繁にあるものではなく、技術を引きつぐことが難しかったという。

赤瓦は、県南部特有の泥岩「クチャ」と赤土などを混ぜてつくった粘土を焼くことでできり、首里城などに使われている。現在はほとんどの工程が機械化されているが、古い建造物の修復などには手づくりの瓦が使われることもあった。

県立芸術大学の教授によると、沖縄では*明時代の中国から伝わった瓦の制作技術が残る一方、中国ではほとんど技術が残っていない。沖縄でも、技術を受けついだ職人はわずかで、貴重だという。

育成事業は、2021年度も予定されている。より専門的な技術者育成のため、2年以上のカリキュラムについても検討していくという。参加者には、首里城の再建や修復のほか、県内の伝統的な建造物の修復にかかわることを期待しているという。

財団の琉球文化財研究室の担当者は「このままでは間違いなく消えていってしまう技術がある。それを引きつぎ、職人たちが切磋琢磨できる場をつくりたい」と話す。

*首里城…琉球王国の王城。城跡が2000年に世界遺産に登録された。正殿などが2019年の火災で焼失し、国は2026年の再建を目指している。

*明…14世紀後半に建国された中国の王朝。琉球王国は明に火薬の材料や馬などを貢ぎ、その見返りとして陶磁器などの工芸品をもらう「朝貢貿易」を行っていた。

調べよう 漆塗り／痛感／頻繁／泥岩／カリキュラム／切磋琢磨

3 赤瓦と沖縄の瓦づくりの技術に関する説明として正しいものを、次のア～エから1つ選び、（　）の中に○を書きましょう。

ア（　）沖縄でも、伝統的な瓦づくりの技術や職人は貴重である。

イ（　）赤瓦はほとんどの工程が手づくりで、古い建造物の修復などに使われることもある。

ウ（　）沖縄の伝統的な瓦づくりの技術は明時代の中国から伝わり、今でも中国に技術が完全に残っている。

エ（　）赤瓦の材料となる粘土は、沖縄県南部特有の泥岩と、赤土「クチャ」などを混ぜてつくられる。

4 沖縄美ら島財団は、育成した職人にどのようなことを期待していますか。記事を参考に書きましょう。

5 沖縄以外にも、日本には伝統技術がたくさんあります。こうした技術を残すためには、どうするべきだと思いますか。あなたの考えを書きましょう。

琉球王国の歴史について調べてみよう。